The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	叶姉妹考 : カルチュラル・スタディーズの視点から見るボディメイキング
Author(s)	周, 典芳
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 319-337
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5225
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

叶姉妹考

――カルチュラル・スタディーズの視点から見るボディメイキング――

周　典芳

〈要旨〉

本研究の目的は、最近爆発的な人気を誇る叶姉妹を対象として、彼女たちのボディイメージをポピュラーカルチャーと見なし、その中にまつわる支配者と被支配者側、抵抗と快楽の構造、作り手と受け手の間に生じる共犯関係をカルチュラル・スタディーズの視点から、解明することによって、彼女たちの人気を解釈することである。

今回の叶姉妹の作品、『スーパービューティ・ボディメイキング』ビデオの内容の分析を通して、叶姉妹の作品は女性が自らの努力によって、「エイジレス」と「最高の美」を手に入れるのができるような夢を与え、女性に自由と主導権を感じさせるということが明らかになる。そして、この願望を叶えることは女性が自分、或いは他者が成功するかどうかの基準となっていると考えられる。

女性が叶姉妹を支持することは、エイジレスな状態を求めていることの現れである。これも女性が男性主導社会において、「年齢」によって女性を選別することに対する抵抗だと考えられる。一方、叶姉妹の存在は、男性主導社会において、「年齢」によって女性を選別する志向を再生産した一方で、女性に「エイジレス」の神話を与え、夢と消費の快楽も与えたと考えられる。

また、叶姉妹の持つボディイメージは、男性主導社会によって作り出された文化と合致しているとも考えられる。しかし、彼女たちのファンは、むしろ女性の方が多い。この一見矛盾しているかのように見える構図の背景には、本稿で何度も繰り返し述べてきた、作られたポピュラーカルチャーと、それを受容する人々との間の共犯関係が存在している。女性たちは、男性主導社会の文化が生み出した女性イメージに対して、それを独自の仕方で読み解き、自分たちの憧れているライフスタイルとそれを結合させることで、自分のものとして楽しんでいるのである。しかし、それが、女性の本来的な「解放」に結びついているかという女性をめぐるポピュラーカルチャーを軸にした、支配・抵抗・受容の構図を描くにとどめたい。

キーワード

カルチュラル・スタディーズ、ポピュラーカルチャー、叶姉妹、ボディメイキング、男性主導社会

一、カルチュラル・スタディーズという視点

社会というものは、実は見えない概念である。概念というのは抽象的なものであるからこそ、いろいろな視点で見るのが可能になる。カルチュラル・スタディーズは文字通り、文化を対象とする一つの研究方法である。文化というものを簡単に解釈すれば、人々が日常的な実践を行為や言語を通じて、身体化・自然化したものである。そして、カルチュラル・スタディーズは社会学の視点[1]で文化を研究するひとつの方法だと言える。

伊藤によるカルチュラル・スタディーズに対する定義によると、カルチュラル・スタディーズは、文化を対象とし、それをズレや対立、妥協や抵抗を含んだなかで、構築された力関係＝政治的プロセスとして分析する作業である（伊藤,2000:76）。

文化の様式を決定するのは、支配の構造[2]だと考えられる[3]。伊藤のカルチュラル・スタディーズに対する定義によって、言い換えれば、カルチュラル・スタディーズのより明白な分析対象は、文化の支配側と被支配側の間に生じる力関係だと言える（伊藤,2000:81）。では、分析対象とされる力関係を具体的に言えば、一体どのような形になるだろうか。社会支配の構造から見ると、ポピュラーカルチャーは本来的には被支配層によって生み出される文化のはずである[4]。しかし、現代社会では、ポピュラーカルチャーを発展させるのは、経済的、イデオロギー的な支配層である。支配層は、自分の利益と支配的な地位を確保するために[5]、被支配層向けの大衆娯楽[6]、つまり、ポピュラーカルチャーを作る。その内部にはしばしばヘゲモニー的に、体制維持のための力が組み込まれている。ポピュラーカルチャーは社会体制内部の支配層によって作り出されるが、その一方で、それは被支配層側の対抗的な力を同時に抱え込んでいるとも言われる（Fiske, 1989:8）。

フィスクによれば、ポピュラーカルチャーは、外部、あるいは上から押付けられるものというより、体制の内側、しかも、底辺から生み出されたものでもある（Fiske, 1989:9-10）。たとえば、ファッション誌が呈示する現代女性像を分析すると、従来の議論ならば、そこに、「上からの固定的ジェンダー・イメージの押付け」を見出そうとするが、カルチュラル・スタディーズの視点で見れば、むしろ、現代女性がファッション誌を読むことは一種の快楽である。このことはすなわち、ポピュラーカルチャーは、実は支配層に立つメッセージの作り手と従属層の受け手との間にある種の共犯関係が潜んでいる（伊藤,2000:82）。

伊藤によれば、カルチュラル・スタディーズの視点の分析対象は、支配層と被支配層との間に生じる力関係である。ジョン・フィスクによれば、その力関係の形は、主導権が奪われた被支配層による支配層に対する対抗[7]である。そして、その対抗は大衆にとっては快楽でありながら、支配層との一種の共犯関係を持つと言える。したがって、カルチュラル・スタディーズの基本的な分析要素は、支配的側と被支配的側の解明、抵抗と快楽の構造、共犯関係の解明だと

も言える。

本研究の目的は、カルチュラル・スタディーズの視点で、最近爆発的な人気を誇る叶姉妹を対象として、彼女たちのボディイメージをポピュラーカルチャーと見なし、それにまつわる支配者と被支配者側、抵抗と快楽の構造、作り手と受け手の間に生じる共犯関係を解明することによって、叶姉妹の人気の原因を探ることである。

二、カルチュラル・スタディーズの視点で ボディメイキングを解釈する可能性

今まで述べたように、ポピュラーカルチャーは支配層が自分の利益を守るために、被支配層を対象として作った文化であるが、被支配層にとって、その文化は支配層に対する抵抗の手段にもなるうる。被支配者は自分なりの解釈による、自分と社会との関係やアイデンティティについて、自分なりの意味を見出すことができ、快楽を感じる。逆に、被支配層がもし歓楽を感じなければ、その文化的な商品やテクストは消費市場で拒否されて、姿が消えるだろう。

産業革命以来、現代科学技術の発達に伴い、マスコミは大量複写、大量生産の時代となった。メディアを通して、モデルのようなボディイスタイルは、規範的なボディイメージとして、現代女性に浸透しているようである。したがって、規範的なボディイメージは希少性と芸術としての礼拝価値[8]を失うことになる。メディアに呈示される女性のあるべき容姿が、女性にとって身近なもの[9]となり、努力すれば、手に入れられるものになってしまった[10]とも考えられる。

この現状と共に、膨大な身体改良・改造にまつわる産業が年々成長している[11]。現在、規範的なボディイメージを獲得することは、女性の重要な課題[12]となっていると言えよう。本稿では、女性が何らかの努力で、規範的だと思われたボディイメージを追求する行動、過程をボディメイキングと呼ぶ。

ボディメイキングもポピュラーカルチャーの一種だと考えられる。男性主導社会における被支配層として位置付けられる女性たちは、規範的なボディイメージにアイデンティティや自分なりの意味を見出すことができるからこそ、消費市場において、ボディメイキングにまつわる産業が年々成長している。このことはすなわち規範的なボディイメージが大衆に認められていると言えるだろう。そして、文化の定義により、日常的な実践が身体化されたものも文化と言える。しかも、個人は規範的なボディイメージを体得し、身体への規律を強化し、理想化されたボディイメージを模倣する傾向がある[13](Bourdieu,1979)。もし、規範的なボディイメージを獲得できない場合は、個人は疎外感、不安、強迫観念に襲われるという象徴的な暴力を受ける場合さえがある(Bourdieu,1979)。

黄順姫はブルデューの象徴的な権力[14](Bourdieu,1979)の視点で、消費行為に対する解釈を行った。彼女によると、消費文化のなかで、身体は快楽の表現手段になっている(黄順姫, 1996:874)。しかも、消費者は必ずしも一方的に強制され、受け入れさせているとは思わない。むしろ、積極的に自らの生活様式のなかにそれを新たに受け

入れ、楽しむのである。象徴的権力は、個々人に象徴的悦楽を与えるのである（黄順姫, 1998:95）。

ブルデューのハビトゥスの視点から見れば、ボディメイキングの持つ象徴的な権力は、その社会・時代の美意識、特定の社会的身分集団・年齢層のライフスタイルから形成される。ポピュラーカルチャーの視点から解釈すれば、ボディメイキングの持つ象徴的な権力の由来は、支配的な社会構造との関係のなかにある。近年問題化している摂食障害[15]は、患者の九割以上は女性[16]である、しかも、ダイエットが主な原因という医学的に信頼できる証拠が次々と出されている。つまり、ボディイメージに悩まされるのは、どちらかというと、女性の方であると考えられる。したがって、ボディイメージの規範によって、被支配の立場に立つのは女性の方であると考えられる。他方、こうした女性に対する支配する側に立つのは、資本社会において、経済的な優勢を持つ男性[17]、および彼らが作り出している男性主義社会だと考えられるだろう。

支配的な社会構造との関係のなかで生じるボディメイキングを解釈すると、男性主導社会は女性の身体へのコントロールの[18]ために、女性のエネルギーを美容に注入させる。そのために、女性を対象として、規範的なボディイメージを賞賛して広げた。女性は規範的なボディイメージに自分のアイデンティティと自分なりの意味を見出すことができるからこそ、規範的なボディイメージを受け入れて、ボディメイキングに熱中するようになってしまうと考えられる。それならば、女性が規範的なボディイメージに対する抵抗は、ボディメイキングを通して、痩せて綺麗になり、排除されたボディイメージに逃走し、独自の美しいボディイメージを展示することによって、快楽を得ることと言えるだろう。しかも、ジョン・フィスクによれば、抵抗は弱者が自分自身の生活の意味を自分たちで管理したいという願いから生まれているのであるからこそ（Fiske, 1989:21）、被支配者側の女性はボディメイキングを批判しない上に、自分が支配側だと信じ込むようになってしまった[19]。この解釈から見れば、男性は女性のボディイメージを支配する側であるが、被支配側の女性は提供された規範的なボディイメージを獲得することによって、自分の美しい身体を誇示することを通じて、快楽を得る。つまり、ボディメイキングの快楽の背景は、元々排除された身体が、努力によって、価値のある身体になれるという発想があると考えられる。しかも、ボディメイキングの手段、整形、エステ、ダイエットグッズなどを選択する時、自己決定の快楽があるとも考えられる[20]。ボディスタイルを変えることにより、日常生活の状況や意味をもう一度自分なりに解釈することができるし、作り変えるものできる。

ボディメイキングは現代社会において、普遍的な一つの生活様式であり、文化であると考えられる。しかも、その中に支配と被支配側、抵抗と快楽の構造、作り手と受け手の間に生じる共犯関係が見える。この点で、カルチュラル・スタディーズの視点で、ボディメイキングを解釈することが可能になる。本稿では一九九七年に彗星のように出現して、タレントではないが、タレント以上人気を持つ、日本を魅惑した謎のセレブリティ、叶姉妹のボディメイキングビデ

オの内容をテクストとして、カルチュラル・スタディーズの視点で、その内容を分析し、規範的なボディイメージの構造と叶姉妹の人気を解明することによって、現代社会における女性のボディメイキングにまつわる社会的な体験を見出すのを試みる。

三、叶姉妹について

叶姉妹[21]は一九九七年に、お姉さんの叶恭子が女性雑誌『ヴァンサンカン25ans』に、読者モデルとして紹介されて、爆発的な話題を呼んだ。後に妹の叶美香と共に、彼女たちが普段使うグッズを紹介した。これも爆発的な売上を記録した[22]。

「日本一のゴージャス姉妹」と呼ばれる叶姉妹は、整形だと思われそうな一般人離れしたボディスタイル[23]とゴージャスな衣装と華やかな生活ぶり[24]で、世間を騒がした。その生活を維持するための資金源[25]、二人は本当の姉妹かどうか[26]など、謎の部分が多いことも話題を過熱させた。

叶姉妹は芸能人ではないが、二〇〇〇年八月十五日に、TBSの朝のワイドショー、特報七四五コーナーによると、芸能界上半期貢献度ランキングの一位は、叶姉妹である。当事の話題人物、デビ夫人、小柳ルミ子、モーニング娘などを飛び越して、僅か半年間で、合計二十回も当局のワイドショートに出て、出現率は十六・八％である。また、女性向けの週刊誌、『週刊女性』は二年連続、平成十二年と十三年の新年号に叶姉妹を飾った。高い注目と人気を獲得した彼女たちは、ビジネスとしてもいい存在である。実は叶姉妹が出たテレビ番組は、視聴率が上がり、写真を表紙に飾った雑誌のその号は九十六％も売れたそうである。踊らない、歌わない、映画スターでもない、いわゆるモデルでもない。しかも、謎と疑惑に満ちているにもかかわらず、叶姉妹の活動は日本国内に止まらず、国際的にも活躍している。

一九九九年にアカデミー賞に参加し、二〇〇〇年にモナコでのカンヌ映画祭にも登場して、盛大な歓迎を受けた。その場でマイケル・ジャクソンとも会釈を交わした。同年度、二十世紀フォックスエンターテイメントから、「日本のボンドガール」の称号をもらった。二〇〇一年二月、アメリカの新聞誌『The New York Times』[27]のインタービューを受けた。一躍国際的な有名人となった。

ゴージャスな外見と相応に、叶姉妹の私生活も華やかである。フランスの俳優ヴァンサン・クルール、ハッリウットの俳優ヴァン・ダンなど、世界の有名白人男優との噂は、叶姉妹の地位を日本のセレブリティから、世界トップスター並になった。

日本の女性が男性に合わせすぎだと指摘し、相手に合わせるより、自分が楽しめる自分の方が大事だ[28]、相手に無償の愛を求めても、自分は無償ではない[29]、など自分の恋愛観をはっきり言い切る叶恭子は、恋愛の面においても、やはり勝ち目を持つだろう。

謎が多い叶姉妹の人気を解明するのは難しいが、叶姉妹の人気の原因は世間ではいろいろな見解がある。実は彼女たちの自信に満ちた姿は、十年以上続く経済衰退と劣等感とに悩まされている日本に

おいては珍しいものである[30]。しかも、叶姉妹のゴージャスな外見は、十年前バブル経済の頃の「うわべだけ」のスタイル、つまり、誰もが「我がこそは」と欲望を張らせていた時代のものである。おそらく経済的に恵まれていたあの時代をもう一度味わわせるところに魅力がある[31]。その上に、神秘感が漂うために、週刊誌やワイドショーが秘密を暴こうとするようになり、頻繁にメディアに取り上げることこそが、結局叶姉妹の人気を助長した[32]とも考えられる。

叶姉妹の爆発な人気の原因について、いろいろな解釈しかたがあるが、興味深いことに、彼女たちの支持者は男性だけでなく、女性にも多いのである[33]。つまり、彼女たちのゴージャスな外見と生き方は多くの女性に認められ、憧れられると考えられる。

ボディメイキングがポピュラーカルチャーとなった現在、多くの女性に支持されている叶姉妹のボディは、代表性のある規範的なボディイメージだと考えてもよいだろう。そうであれば、彼女たちが受け手に伝えるボディメイキングに関するメッセージをカルチュラル・スタディーズのテクストとして分析すれば、現代社会における女性の規範的なボディイメージのあり方、女性がボディメイキングにおいての抵抗と快楽の構造、共犯関係を解明することができると考える。テクストを分析することにより、叶姉妹の人気の理由を見出すことは可能だと考えられる。そして、叶姉妹の人気を解明することによって、現代社会における女性がボディメーメイキングにまつわる社会的な体験を見出すのが本稿の目的である。

いままで、叶姉妹が出した作品は、写真集、ビデオ、フォトエッセー、DVD、シングル曲などいろいろあるが、本稿は研究目的と合わせるために、叶美香がマネジメントして、叶恭子の自分の美意識と日常に実践しているボディメイキングを元に、自分自身が出演した『スーパービューティ・ボディメイキングⅠ、Ⅱ』[34]ビデオを研究対象として、分析を行い、カルチュラル・スタディーズの視点で女性のボディメイキングを解釈して、叶姉妹の人気を解明しようと試みる。

四、叶恭子のスーパービューティ・ボディメイキング

1、ビデオの内容についての紹介

叶恭子の『スーパービューティ・ボディメイキング』ビデオは二本でワンセットとなっている。ステージ一は『KYOKO'S DAILY LIFE―歩くだけでキレイになれる』、このビデオで、叶恭子は自分の美意識について語っている。日常生活における行動に注意を払えば、美しくなれると彼女は主張している。ステージ二は『KYOKO'S DAILY EXERCISES―毎日のエクササイズ』である。このビデオでは、美しい体を作るための美容体操を紹介する。このビデオの撮影は二〇〇〇年に行われており、場所はハワイのワイキキビーチ沿いの五つ星ホテル、ヒルトンホテルの客室、客室のバルコニー、花園、スイミングプールサイドである。以下はビデオ『スーパービューティ・ボディメイキング』の大体な内容である。

ステージ一、『KYOKO'S DAILY LIFE―歩くだけでキレイになれ

る』ビデオの最初には、叶恭子は自分自身を大切にすることを強調する。そして、美しいボディラインを作るための基礎をスタンディング、ウォーキング、シッティング三つの日常生活における行動に分けて、自らが示範して、正しい姿勢と美容や健康と繋がっていることを説明した。そして、美しいフェイスラインは正しい立ち方、歩き方、座り方、すべてと繋がっていると説明した。次に、朝一杯の水を飲むことは、自分の体調を知る機会である。自分の中にある、今日の自分が分かってくる。その水によって、判断できる。前日のデータも朝の水で蘇る。それによって、今日の食事を決める。

続いて、張りのある肌を創るための食事の内容と取りかたを説明して、蛋白質の重要さと野菜と一緒に取るのは欠かせないことや、ダイエットの意味は正しく食べること、減量、断食はリバウンドと繋がるため、駄目なことであると強調した。そして、精神と身体を整えるメディテーションを紹介して、呼吸とエクササイズ、呼吸とエネルギーとの関係を説明した。

最後に、美しいフェイスラインはネックラインと関わっていること、自分自身の状況を知ることの大事さ、美しいボディラインは正しいエクササイズから始まることを強調した。締めくくりとしては、美しさは年と関係がないことを強調し、日本の社会通念を否定して、欧米の例をあげて、熟年層の女性にも若い人が勝てない魅力があると主張した。

ステージ二、『KYOKO'S DAILY EXERCISES—毎日のエクササイズ』ビデオの始めに、叶恭子は理想的なボディイメージは女性らしいボディであることについて語った。具体的に言えば部分的に締まっていて、多少筋肉がついて、薄い女らしい脂肪がついているようなボディスタイルである。その上に身体は、自分と一生付き合うものであるから、長い目で見ると、とても大事なものであるという考えも述べた。次はウォーミングアップ・ストレッチから、脚のエクササイズ、腹部からヒップにかけてのエクササイズ、腕のエクササイズ、バストのエクササイズ、クールダウン、ストレッチまで、六つのステップを含めて、叶恭子自身がエクササイズの示範をした。

2、叶恭子の美意識

以上は、叶恭子の『スーパービューティ・ボディメイキング』ビデオの大体な内容である。ここからはまず、叶恭子の美意識を見てみよう。

> 自分自身を大切に生きること、これは是非皆さんにお勧めしたいこと。エゴイストになることをお勧めするのではなくて、自分自身を大切に生きること、自分自身を美しく生きること。やはり自分自身の筋肉をトレーニングしながら、エイジレスな状態を保ちながら、というふうなことが自分の幸福の一つに繋がるきっかけにもなること。それを考えて生きますと、自然とそれが楽しくなってくると、まず、マインドがとても大事だと思いますので、そういう風な自分自身の心懸けだとか、何が自分にとって、ハッピーなのか、そういうことをとても考える時

間を持つことから始めた方が、正しいエクササイズにたどり着くあの道のドアかもしれない、と私は思います。

私たちがつねに、日常的に、思っています。美しさというものは、やはり単に外面的なものではなく、内側から滲めてくるようなこと、それがやはり美しくエネルギー、輝くエネルギーとして、皆さんの何か感じるべき所に来ると思います。たとえば、もういくつだから、とかというふうな言葉をあまり持たずに、そういう時こそ、明日から始めることによって、今の自分よりも必ず努力することによって、いまの自分よりも必ず違ってくることは、間違いなく事実なので、そういうことに目標を置きながら、毎日続けることが、やはりこうあの女性として、輝いて生きることに繋がります。そのことによって、やはりエイジレスなものが、単に表面的な美しさではなく、人生に目標があって、輝いて生きているだとか、そういう風なエネルギーを内側から発するきっかけになったりするので、やはりこう長く続けること、努力することがとても大事だと思います。

以上は叶恭子が語った自身の美意識とトレーニングに対する考えである。簡単に言えば、美しい状態を保つのは、自分を大事にすることである。その美しい状態を具体的に説明するとすれば、エイジレスな状態になるといえる。エイジレスな状態を保つために、筋肉トレーニングはその方法である。そのトレーニングは自分の努力次第である。

また、用語使いから見れば、叶恭子が自分の美意識を語る時に、「自分自身」と「自分」をよく使う。したがって、叶恭子の美意識の中に、「自分自身」が一番強調されると考えられる。しかも、「自分自身」を大切にすることは何よりも大事なことであることが、叶恭子の美意識の基盤だと考えられる。

そして、叶恭子にとって、美というものは輝くエネルギーを内側から発散する。エイジレスな状態であり、そのための筋肉のトレーニング、「正しいエクササイズ」はボディメイキングと同義であると言える。叶恭子の語らいから見れば、彼女が一番強調したのは「自分自身を大切にすること」の具体像は「エイジレスな状態になる」ことであると分かった。

3、叶恭子によるボディメイキングの重要性とその目標

日常の中には、たくさんの美しくなるチャンスが存在しています。たとえば歩き方を変えただけで脚を引き締め美しいヒップラインを創ることが出来ます。たとえば正しい座り方で内臓が正しく働き、肌も美しくなります。ほんの少し知識があれば美しい身体を創ることは、とても身近なものなのです。

大切なのは自分自身の身体をよく知り、ご自身に合うダイエット方法を見つけること、そして美しくなることを楽しむことです。どういう自分になりたいか、意志の力が“なりたい自分”

を創るのです。

ダイエットはよりパーソナルなものであるべきだと思います。自分を知り、自分に合った効果のあるダイエット方法エクササイズを見つけましょう。ダイエット＝ボディメイキングに費やす時間は、自分を育む、自分のための贅沢な時間です。自分自身のために、いまから始め直しましょう…遅すぎるということは決してありません。

叶恭子のボディメイキングに対する発言を言い換えれば、女性がなりたい自分になれない、つまり不満足な状態にいるのは、美しい体を持っていないからである。これはいいボディメイキング方法を見つけていないからである。その由来は、自分自身をちゃんと知らない、「ほんの少し知識」が足りないが故である。そして、不満足な自分と別れるために、ボディメイキングは救いである。その救いの実践は今からでも遅くないようである。

叶恭子の以上の発言から、いいボディイメージの方法を見つけるために、自分自身をよく知って、自分と合っている方法を探す。そして、その方法の実践は、身近に実践できる。この二つの要素を含めるボディメイキング方法は、いい方法だと言える。そして、ボディメイキングの最後の目標は、「なりたい自分になる」ことであるようである。

4、努力によって得られるボディイメージ

次に、【スーパービューティ・ボディメイキング】ビデオの第二登場人物、叶恭子の専属トレーナー／カート・ジョンソン氏のコメントから、叶恭子の女性としてのランクと女性と努力との関係を見る。

専属トレーナー、カート・ジョンソン氏のコメント

ハリウッドでは多くの美しい著名人に出逢う機会がありますが、叶恭子さんほど内面の美しさを持つ人にはこれまで会ったことはありませんでした。彼女は常に美を追求し、創造し、維持し続けています。これまで多くの人が試みて出来なかったことです。みなさんも叶恭子さんのように素晴らしい肉体、健康的な精神を手に入れることができるはずです。遅すぎるということはないのです。今日からでも、いつからでも始めることが出来るのです。

カート・ジョンソン氏は専門家の立場と専門知識で、叶恭子の素晴らしさを肯定する。また、叶恭子が女性としてのランキングはハリウッド女優より上であることで、彼女のカリスマ性と特別性を強調する。最後に、叶恭子は女性の指標であって、普通の女性は努力すれば、叶恭子のレベルにも達成できる。要するに、肉体と精神によって、女性としてのランキングを判断できる。普通の女性が普通であるのは「素晴らしい肉体」と「健康的な精神」を持っていない

からである。つまり、普通の女性の状況は、「変わるべき」、「不満足な肉体」と「不健康的な精神」とも言える。もし女性は昇進したければ、その救いは努力である。しかも、その努力の目標はハリウッド女優を超えて、カリスマ的な存在の叶恭子である。彼女が持つ「素晴らしい肉体」、具体的に言えば、スリー・サイズが九十八、五十八、九十一のボディスタイルは規範的だと思われるボディイメージである。そのようなボディイメージは、最高の女性としての証でもある。しかも、「素晴らしい肉体」は「健康的な精神」と関わっている。普通の女性は努力が足りないので、「不満足な肉体」と「不健康な精神」のレベルに留まっている。したがって、努力が必要である。そして、努力すれば、ハリウッド女優を超えて、叶恭子のレベルに達成できるという示唆も見える。カート・ジョンソン氏の発言により、普通の女性は、努力が足りないこそ、普通の女性のランクに留まる。しかし、努力によって、ハリウッド女優を越えて、叶恭子のレベルに達成できると示す。

五、カルチュラル・スタディーズの視点から見る叶姉妹の人気の理由

1、エイジレスの神話

叶恭子の『スーパービューティ・ボディメイキング』ビデオの内容分析によると、叶姉妹が常に強調していることは、「自分自身は大事」、「私は世界で一番だ」、「努力すればあなたもできる」、という三つのポイントにまとめられる。

叶姉妹のビデオにより、女性に「自分自身は大事」という考えを与えられる、これは「尽くすことが美しい」という伝統的な思想とは正反対とも言えるだろう。そして、叶姉妹の「自分自身は大事」に対する実践は、筋肉のトレーニングによるエイジレスの状態である。

そもそも老衰は自然現象である。科学がいくら日進月歩になっても、永遠に青春を保つのは、夢にはほど遠いと言えるだろう。ジェンダーの視点から見れば、「エイジレス」は自然化された男女の関係における社会が女性に対する「女らしさ」の条件の一つ、女性の社会的な生活に制限を加える鎧と考えられる。しかし、カルチュラル・スタディーズの視点から見れば、「エイジレス」になりたい欲望は女性自身からのものである。さらに、エイジレスは女性が男権社会において、「年齢」によって女性を選別することに対する抵抗でもある。それならば、「エイジレス」は女性に対して、鎧でありながら、「抵抗」の手段だと言えよう。そして、一九六二年生まれの叶恭子[35]は女性にとって、説得力のある「エイジレス」の規範だと考えられる。以下は叶姉妹の女性のファンがインターネットの掲示板に書き込んだことである[36]。

叶姉妹ファンの書き込みその一

ドレスも素敵だけど…やはりあの肌&パーツの美しさには驚きだけですね。毛穴ないですよ、特に恭子さんは！握手の時に

は言葉がでず、恭子さんには気持ちが爆発！「あ～ん、もう恭子さん大好き！」と猫なで声を出してしまいました…もちろん恭子さんは、美しい笑顔で微笑み「んふっ、ありがとう～」とのお返事…あ～たまりましぇん。

以上のように、四十才近い叶恭子の毛穴のない状態の皮膚に女性も驚いた。叶姉妹は女性にとって、不可能に近いエイジレスな状態を保つ規範だろうと考えられる。そして、女性が「自分自身を大事にしたい」という名分で、スポーツクラブやエステへ通ったり、高い基礎化粧品を買ったりする時に、経済的な面で依存者としての存在の女性は罪悪感が薄まるかもしれない。しかも、ショッピングという行動は被支配者の女性に選択の自由を与えるし、女性がショッピングする時、いつも快楽が伴う。消費する時に、エイジレスな状態を想像しながら、女性は至福の瞬間を感じられると考えられる。したがって、叶姉妹の存在は、男権社会において、「年齢」による女性を選別する志向を再生産した一方で、女性に「エイジレス」の神話を与え、夢と消費の快楽も与えたとも言える。

2、努力の神話

ビデオの中では、「努力すれば、あなたもできる」ということも叶恭子が頻繁に強調する点である。彼女のプライベートトレーナーのカート・ジョンソン氏のコメットも、努力すれば、あなたも平凡な自分とさよなら、ハリウッド女優を越えて、叶恭子のレベルに達成できるという示唆が溢れる。つまり、ビデオの内容により、女性にとって努力の目標はハリウッド女優を越えて、叶恭子のようなボディスタイルを入手することだと考えられる。このようなボディスタイルを手に入れるとしたら、女性は成功を感じて、達成感に充ちあふれると考えられる。

カルチュラル・スタディーズの視点からみれば、消費者としての女性は、ボディメイキングを経由して、自分なりの意味を見出せるからこそ、ボディメイキングにまつわる商品は現在では消費市場で拒否されていないのである。したがって、叶姉妹の存在は、女性がボディメイキングにニーズを持つ上に、ビデオを経由して、身体改造の夢に辿り着く規範だと言えよう。そもそも「努力」をするかどうか、それは本人の意識次第である。これは女性に自由と主導権を与えると考えられる。この自由と主導権を得られることによって、女性は主体性の感覚や自尊心を持てるようになった。したがって、自分自身による「努力」を強調することは、女性に自由と主導権のような快楽を与えるとも言える。女性に「努力すれば、あなたもできる」のような示唆を与えるのは、現実にボディメイキングの難しさと辛さを無視できて、女性に「私もできる」というような考えを与え、叶姉妹を賞賛して、彼女たちを努力の目標として受け入れさせるためと考えられる。これは叶姉妹が女性の身体を体制化する一方で、女性は叶姉妹を求めることによる共犯関係と言えよう。以下は叶姉妹のファンがインターネットでの書き込みである。

叶姉妹ファンの書き込みその二

「狙った獲物は逃がさない」言いかえると、常に努力、というところでしょうか。恋でも何でも、偶然をアテにしていてはダメなんですよね。う～ん、意志の強さを物語るイイ言葉だと思います。さすが恭子様！！改めて開眼させていただきました。

この書き込みによれば、叶姉妹が常に強調している「努力」はボディメイキングだけに指すではなくて、恋の面でも、生活の面でも、自分の運命を把握したければ、「努力」が必要である。叶姉妹の「努力」はやや攻撃性を含むにも関わらず、女性に「改めて開眼させていただきました」と思わせた。これは女性が叶姉妹を通して、自由と主導権を感じたとも言えるだろう。

3、美が持つ権威性

次に、「私は世界で一番だ」という叶姉妹の自己呈示を考える。ビデオの中で、カートジョンソンのプロとして、「権威」なる判断を通じて、叶恭子はハリウッド女優よりランクが高いということを視聴者に示した。したがって、「私は世界で一番だ」という要素も、叶姉妹の重要な特徴の一つだと考えられる。

ゴフマンによれば、大方の階層社会には、高い階層の理想化ならびに低い階層の人々の側より、高い階層への上昇意欲の理想化が存在する（Goffman,1959:40-41）。叶姉妹は常に世間に示したゴージャスなセレブリティの服装は、必ずしも高い階層の人々の現実を再現したとは言えない。逆に言えば、セレブリティがあるべきだと思われる、華やかな生き方と外見を装っているかもしれない。そして、彼女たちの人気ぶりから見れば、多くのファンもそれについて賛成し、セレブリティのようなライフスタイルに憧れている可能性が高い。

また、叶姉妹は本当に世界で一番の女性だろうか。この問いに答える前に、世界で一番の女性は存在するかどうかを考えた方がよいと思う。単に「美」という基準で判断しても、時代、文化によって、美の基準は違ってくるだろう。したがって、「世界で一番」の女性はまずいないと言える。とくに、「素晴らしい肉体」や「健康的な精神」を基準として女性を選別するのは、その基準自体が疑われるだろう。しかし、叶姉妹を支持しているのは殆ど女性である。彼女たちの多くのファンにとっては、叶姉妹のような外見はどちらかというと、現代日本社会において、権威の持つ「美しい」方だと信じられるからこそ、彼女たちが推薦された品物が爆発な売上を記録できた。つまり、現代日本社会において、全てとは言えないが、一部の女性にとって、叶姉妹のようなダイナミックなボディスタイルは規範的だと想われるボディスタイルであると言える。

叶姉妹の外見についてのファンの考えは、以下のようなインターネットでの書き込み[37]が示せる。

叶姉妹ファンの書き込みその三

完璧な美を表現している叶姉妹と、その美しさを引き立てる

ように配置されている美しい静物写真の組み合わせが絶妙！二人の美しさを最大限に生かすような本の作りですね。完璧ですね。ホント芸術品だわー。昨夜もじっくり見てから眠りました。

叶姉妹ファンの書き込みその四

恭子さんは完璧な美しさですね。顔の数々のショット、好きです。どうすれば自分が魅力的なのか本当によくわかっていらっしゃる。鏡の前にいるかのようにその時その時で一番いい自分を出せるなんてすごい…

以上の書き込みから見れば、叶姉妹の美しさは女性のファンにとって、カリスマのような存在である上に、彼女たちの身体は称賛されるボディイメージでもある。つまり、叶姉妹のようなボディイメージを持つ女性は、勝利者だと思われて、叶姉妹のスタイルも多くの女性にとって。努力の目標であると考えられる。

競争社会において、敗者が存在しているからこそ、勝者の立場が確保できる。ペルが権威に対する見解によれば、メリトクラシーは、自らの権威を勝ち取った人々によって構成される支配である。そして、不平等なメリトクラシーは、区別を差別化とし、劣位の者をいやしめるような支配である（Lukes,1978:64）。叶姉妹が自分の「美貌」を優位性を持つ特質として強調するのは、勝者の立場を確保することだと考えられる。そして、

現代社会における女性のボディイメージという視点から見れば、ボディメイキングは女性が男権社会において、昇進するための手段の一つだとも言える。つまり、男権社会において「美しい外見」は、女性に自分を綺麗にさせることによって、運命を把握できると信じさせた。フェミニズムの観点から言えば、ボディメイキングは、結局女性のエネルギーを達成できない美の追求に導き入れ、女性の自己評価を低下させたものであると指摘をうけるかもしれない。

しかし、叶姉妹の人気ぶりから見れば、少なくとも現代日本社会において、「美貌」は確かにある程度女性の昇進と関わっているようである。しかも、叶姉妹のボディメイキングに対する「努力」によって、不満足な自分と訣別して、よりワンランクアップの女性になれるという思考から見れば、現実的な社会相互作用において、「美貌」は他者と自分の価値を判断する際、使われている基準の一つであると、多くの女性に信じられて、使われているのも事実なのだ。

六、結論

今回叶姉妹の作品、『スーパービューティ・ボディメイキング』ビデオの内容の分析を通して、彼女達の美意識を解明した。それは「エイジレス」、「努力」、「私は世界で一番だ」という三つの要素である。この三つの要素とも、男性主導社会において被支配側におかれている女性たちが、しばしば求め続けているものだと考えられる。叶姉妹の作品は女性が自らの努力によって、「エイジレス」と「最高の美」を手に入れるのができるような夢を与え、女性に自由と主導

権を感じさせる。女性がエイジレスな状態と規範的だと思われるボディイメージを獲得するための願望を叶えることは、女性が自分、或いは他者が成功するかどうかの基準となっているとさえ考えられる。

女性が叶姉妹を支持することは、エイジレスな状態を求めたいということの現れである。これは、見方によれば、女性が男権社会において、「年齢」によって女性を選別することに対する抵抗だと考えられる。一方、叶姉妹の存在は、男性主導社会社会において、「年齢」による女性を選別する志向を再生産した一方で、女性に「エイジレス」の神話を与え、夢と消費の快楽も与えたからこそ、爆発な人気を獲得したと考えられる。

また、女性がボディメイキングにニーズを持ち、ビデオを経由して、身体改造の夢を実現したいと考える女性が数多くいることを叶姉妹の存在は示している。そもそも「努力」というものは本人の意識次第である。これは女性たちに、現代の男性主導社会ではしばしば奪われてきたと感じられている自由と主体性の感覚や自尊心を生み出すとさえ言える。このことが、叶姉妹が男性主導社会に合わせる形で女性の身体を体制化しているように見えるにもかかわらず、女性たちが彼女たちを支持する構図を生み出しているのである。

叶姉妹の持つボディイメージは、実際、女らしい。彼女たちが着ているドレスも、どちらかと言えば男性の好む露出度の高いものである。その意味で、彼女たちの身体イメージは、男性主導社会によって作り出された文化と合致している。しかし、彼女たちのファンは、むしろ女性の方が多い。この一見矛盾しているかのように見える構図の背景には、本稿で何度も繰り返し述べてきた、作られたポピュラーカルチャーと、それを受容する人々との間の共犯関係が存在している。女性たちは、男性主導社会の文化が生み出した女性イメージに対して、それを独自の仕方で読み解き、自分たちの憧れているライフスタイルとそれを結合させることで、自分のものとして楽しんでいるのである。しかし、それが、女性の本来的な「解放」に結びついているかという女性をめぐるポピュラーカルチャーを軸にした、支配・抵抗・受容の構図を描くにとどめたい。

注釈：

(1) 他の学術の視点で行う文化研究を区別するために、社会学の視点で行う文化研究は、カルチュラル・スタディーズと呼ばれる（橋本, 1998）。

(2) グラムシのヘゲモニーの視点で、文化による支配が発見された。文化を独占することによって、人々を支配することができる。つまり、文化のあり方を決定したのは、簡単に言えば、支配の構造である。

(3) たとえば、労働者の文化的価値を低めておくと、彼らの社会的地位も低く保つことができる。労働者の生活を描いた小説には文学的価値がないとすると、労働者の社会的価値は低いとなる（橋本, 1998:3-4）。

(4) Stuat Hallがポピュラーカルチャーに対する定義：支配勢力と民衆との対立の中で形作られる。

(5) たとえば、大衆の娯楽には文化的価値がないとすると、大衆は自分たちの完成も低いと考え、社会的地位を自分から低く抑えるのである（橋本, 1998:4）。このように、支配層は、大衆文化を排除することによって、支配的地位を確保できるのである（橋本, 1998:4）。

(6) パレートによると、社会を支配しているのは、少数のエリートである。したがって、被支配者側を大衆、そして、大衆向けの娯楽をポピュラーカルチャーだと言える。

(7) ジョン・フィスクの観点によれば、ポピュラーカルチャーはつねに対抗文化なのである。支配的イデオロギーに反し、従属的立場にいる者たちが自分たちのための社会的意味を生み出した。この抵抗の努力を成功させることが民衆にとっての快楽であり、民衆の快楽がつねに社会的・政治的な色彩を帯びているにはそのためである(Fiske, 1989:11)。

(8) 複製技術の発達と伴って、オリジナルの「1回」、「ここだけ」の特有性は完全に失ってしまった、複製品は同一の作品を大量に出現されるにつれて、受け手のほうに近づけることによって、一種の現実性を生み出した（Benjamin,1936:13-14）。

(9) たとえば、人が映画を見る時、観劇し同化することによる感情浄化作用によって、映画の内容を自己の世界に巻き込んでいって、現実と映画内容の境目が曖昧となった。ベンヤミンは、この例で映画が大衆運動の担い手である。映画の社会的重要性を説明した(Benjamin,1936:14-15)。

(10) 国民生活センターが一九八八年に主婦を対象に実施した調査によれば、「努力して現在の体形・体重を維持したい」と「痩せたい」とをあわせたスリム志向派は年代差がほとんどなく、全体で六十三・一％にも達した。また、日経リサーチが一九八八年に行った調査によると、エステティックサロンに今後通って見たい・興味があるという女性は両項目あわせて二十代で五十三・三％、三十代で三十五・四％、四十代が二十五・八％、五十代でも十一・六％見られる。そして、国民生活センターの調査によれば、自力で何らかの痩身努力を行った過去に行ったことのある人は、過半数の五十二・六％である。

(11) たとえば、エステは一九七二年に店舗数約百店、延べ客三万人、年商十億円であったが、一九九二年には二万五千店延べ、客数二千万人、年商五千億円へと伸びた（諸橋泰樹,1994:127）。

(12) アメリカの『グラマー』雑誌が一九八四年三万三千人の女性を対象にして行われた調査によって、現在アメリカ女性の一番の目標は仕事や恋ではなく、五、六キロを痩せることである(Wolf,1991)。

(13) ブルデューのハビトゥスの概念により、理想的なボディイメージは正統なものとして、人々に個人に受け入れられると、個人は自らの身体管理の新たなハビトゥスを体得し、身体への規律を強化し、模倣する（Bourdieu, 1979）。

(14) ブルデューは、正統的ものとして、人々に押付け、教え込む象徴的な力を象徴的権力と呼ぶ（Bourdieu, 1979）。

(15) 摂食障害の主な症状は、無食欲症（拒食症）と食欲高進症（過食症）であり、その患者の九十から九十五パーセントは女性である。拒食症の医学的影響としては、低体温、浮腫、低血圧、心拍異常、生毛、不妊など。過食症の医学的影響としては、脱水、電解質異常、癲癇発作、不整脈、などである。

(16) アメリカ無食欲症・食欲高進症協会は、拒食症と過食症は毎年百万人のアメリカ女性を悩ませており、毎年、十五万人のアメリカ女性が拒食症のために死んでいると発表している。また、三万人

が吐剤濫用者の仲間入りをするとも報告している（Wolf,1991）。

(17) 資本主義における支配層の基本的な権力は経済的なものだと考えられる。とくに、男性は主な働き手である東アジアでは、男性が支配層だと考えるのは適切だと思う。

(18) 一九七〇年代に盛んになったフェミニズム運動は、女性のために、政治的、経済的な権利を当時までの主導していた男性に貰った。従って、現代二十代、三十代の女性が持つ自己主張の権利・自由は単に与えられた権利・自由といった方がより適切かもしれない。しかし、女性は政治的、経済的な権利を手に入れた現在、女性のみに要求される容姿美への信奉、外的基準の押付けを、女の意識向上を阻む最大悪として、多くのフェミニストたちが批判してきた。若さ、容貌の美醜という、個人の本質とは直接関係のない外的基準での価値評価は、女たちの間に差別意識を作り、女を女性性のなかに抑圧する道具として利用される。しかし、そのような風潮とは裏腹に依然として「肉体美」や「若さ」の偏重は衰えるどころか、女たち自身が助長さえしている感じがある（Wolf,1991: 別府恵子,1993:83-84）。

(19) ジョン・フィスクによると、この管理権は被支配側が自分の存在の意味を、いくらかでも自分で管理できなければ、行動を行う時の主体性の感覚や自尊心を持てなくなるからである（Fiske, 1989:38）。

(20) 消費する時は、消費者が主導権を握っている。資本主義社会において、お金は力であるなら、経済制度の中で服従を強いられている人たちにとって、買い物する時だけが主導権を発揮できる時である（Fiske, 1989:45-46）。

(21) 叶姉妹の年齢は公表してないが、お姉さんの恭子は一九六二年生まれ、妹美香は一九六八年生まれの説が有力だそうである。（ホームページ、「君は叶姉妹を知っているか？」より）。

(22) 叶姉妹が愛用していると紹介された歯磨き粉、アパデント（二千八百円）は五倍、柘榴ジュース（千五百円）は七倍の売上、ハンガリーのハーブ酒、ウニクム（三千九百円）は一瞬で八百本が売れたのである。（ホームページ、「君は叶姉妹を知っているか？」、http://sun.endless.ne.jp/users/k_hashi/kanou.html）より。

(23) 叶恭子は身長が168センチ、スリーサイズが九十六、五十六、九十。叶美香は身長が170センチ、スリーサイズが九十八、五十八、九十一。叶姉妹の公式ホームページ、（http://www.ponycanyon.co.jp/asianbeauties/index.html、ポニーキャニオン社）より。

(24) たとえば、一ヶ月家賃100万円のマンションに住み、世界三つしかない巨大なダイヤモンドを指につけ、ロレックスの時計は小学校の時から、一本一千万ぐらいのセンチュリー時計を4本持っているなど。外国のビーチでプライベートコーチの指導によるトレーニング、大島渚監督の「御法度」の上映会に参加した時に、全長九メートルのリンカーン・リムジンで登場したなど。リッチな生活ぶりで世間を騒がせた（ホームページ「叶姉妹研究室」より、http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/enter.htm）。

(25) 叶姉妹の職業については、去年まではトータルライフアドバイザー、今年はライフスタイルコンサルタントと変わった。具体的な仕事内容について、叶恭子によると、「私たちは、朝起きてから、ベッドに入ってよく寝るまでの生活すべてのアドバイスをしているのです。」つまり、自分の生活を通して得た経験をもとにアドバイスをしているわけである。（Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb.20.2001；叶恭子,2000）。

(26) 二〇〇〇年五月二十三日のワイドショーに、恭子の実父と名乗る

男性が登場し、叶恭子の七五三の写真を持ちながら、叶美香は娘ではないと暴露した（ホームページ「叶姉妹研究室」より、http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/enter.htm）。

(27) Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb. 20, 2001.

(28) 二〇〇〇年十二月二十三日に、千葉県浦安市のヒルトンホテル東京ベイで行ったディナーショー（ホームページ「叶姉妹研究室」より、http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/enter.htm）。

(29) 二〇〇〇年十月二十日に、ウェスティンホテル東京のギャラクシールームで行ったディナーショー（ホームページ「叶姉妹研究室」より、http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/enter.htm）。

(30) Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb. 20, 2001.

(31) 朝日新聞社会文化面担当のYoshinori Shinoharaにより（Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb. 20, 2001.）。

(32) 音楽プロデューサー酒井政利による（Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb. 20, 2001.）。

(33) ディナーショーとサイン会に来場したファンは男女とも多いが、大体四十才以上のマダム、叶チックな若い女性、サラリーマン風の男性とオヤジ風の男性が多かった。（ホームページ「叶姉妹研究室」より、http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/enter.htm）。しかし、叶恭子自身の推測によると、自分たちのファンの大半は女性である（Strom, Stephanie, Mysterious Celebrity Sisters Hypnotize, The New York Times, Feb. 20, 2001.）。

(34) ビデオのIは『KYOKO'S DAILY LIFE—歩くだけでキレイになれる』、IIは『KYOKO'S DAILY EXERCISES—毎日のエクササイズ』、いずれもポニーキャニオン社二〇〇〇年に出品、全長二十七分間のものである。

(35) 同注21。

(36) ホームページ、「魅惑のサロン蜜の後味」より（http://203.178.126.19/190/gb.cgi?room=kankat22）。

(37) 同注36。

参考文献：

Benjamin, Walter (1936), *Walter Benjamin*: WERKE Band 2.（「複製技術時代における芸術作品」、高木久雄・高原宏平訳。『ヴァルター・ベンヤミン著作集2：複製技術時代の芸術』、佐々木基一編集解説。p.7-60、1971、晶文社）。

Bourdieu, Pierre (1979), *Distinction: critique sociale du jugement.*（『ディスタンクションII』、石井洋二郎訳、1990、新評社）。

Fiske, John (1989), *Reading the Popular.*（『抵抗の快楽』、山本雄二訳、1998、世界思想社）。

Goffman, Erving (1959), *The Presentation of Self in Everyday Life.*（『行為と演技：日常生活における自己呈示』、石黒毅訳、1974、誠信書房）。

Lukes, Steven (1978), *Power and authority.*（『権力と権威』、伊藤公雄訳、1989、アカデミア出版会）。

Wolf, Naomi (1991), *The Beauty Myth,*（『美の陰謀』、曽田和子訳、1994、株式会社ティビーエス・ブリタニカ）。

伊藤公雄（2000）、「カルチュラル・スタディーズが問いかけるもの」、『理論と方法』、第29号、Vol.15、No.1、p.75-87。

叶恭子（2000）、『蜜の味:ミレにアム・ミューズ』、株式会社幻冬社。
橋本　満（1998）、「カルチュラル・スタディとは何か」、伊藤公雄・橋本満編、『初めて出会う社会学』、p.1-19、有斐閣。
黄　順姫、1998、「身体文化と象徴的権力」、日本スポーツ社会学会編、『変容する現代社会とスポーツ』、pp.93-105、世界思想社。
別府恵子（1993）、「美しい神話とトリ・モリスンの青い目がほしい」、『女性学評論』、第7巻、pp.83-97、神戸女学院大学女性学インスティテュート。
諸橋泰樹（1994）、「女性雑誌にみる“痩せ”ブームを探る」、松井　豊編、『ファンとブームの社会心理』、pp.115-140、サイエンス社。

Considering Female's Body Making Behavior as a Popular culture
~ Analyzing Kano Sisters' Exercise Videos through the Perspective of Culture Studies~

CHOU Dienfang

Kano Sisters appeared in 1997. Their first step was profiled as celebrities and introduced their luxurious lifestyles by major upscale women's magazine '25ans'. Soon, they became famous and got explosive heat from women, and are known as the most gorgeous sisters in Japan. Not a day goes by without one of them hogging airtime on a TV variety show, hawking breast-enhancing vitamins in commercials or eclipsing dimmer stars on the gossip pages. Even that they do not act like actresses, do not dance, don't sing, they still receive an explosive fame in Japan.

The purpose of this paper was to explore the popularity of Kano Sisters by using the perspective of culture studies. By using this perspective, the meanings of body making that practiced by women, and the meaning of social structure to them were connected.

In culture, that struggle is for meaning, the dominant class tries to present meanings favorable to itself as common sense. However, other classes resist and try to make meanings that serve their interests. Through analyzing the context of Kyoko Kano's body making videos, the aesthetic sense and the thought of Kano Sisters were found. Moreover, via the results of the analysis, the there myths, beauty, ageless and effort myths, which were the most important factors of Kano Sisters' thought, were investigated.

The Sisters' heat in Japan reflected that in the male-dominated Japanese society, women believe in the authority from beauty and want to try their best in keeping fit and looking young forever. This kind of women's intentions could be considered as a solution for exchanging the position of recessive class to the dominant one. By considering the meanings of female's body making behavior, it is not only the oppression from male-dominated society but also the liberation of women. However, the phenomenon of Kano Sisters shows that women acknowledge the male-dominated society. Moreover, via body making, they also appreciate the feeling of freedom and dream that one day they can have nice proportions, and can be as successful as their idol, Kano Sisters. Therefore this kind of happiness and freedom is the meanings of body making, and the purpose of body making to women could be considered as one of the measures against the male-dominated society.

Key Words

culture studies, popular culture, Kano Sisters, body making, male-dominated society